

日本語讀本 卷四

ブラジル日本人教育普及会



もくろく

一	富士の山
二	かけっこ
三	海軍のにいさん
四	天の岩屋
五	七面鳥
六	ゆめ
七	逃げたらくだ
八	よし子さん
九	をろちたいち
十	石だん
十一	トウモロコシ
十二	かぐやひめ
十三	かなりや
十四	大江山
十五	白兔
十六	一足久久
十七	百合若
十八	虎ト蟻
十九	羽衣
二十	夏休



一 富士の山

あたまを

雲の上に

出し、

四方の山を

見おろして、

かみなり様を

下にきく、

(新漢字 雲)

富士は

日本一の山。

青空 高く

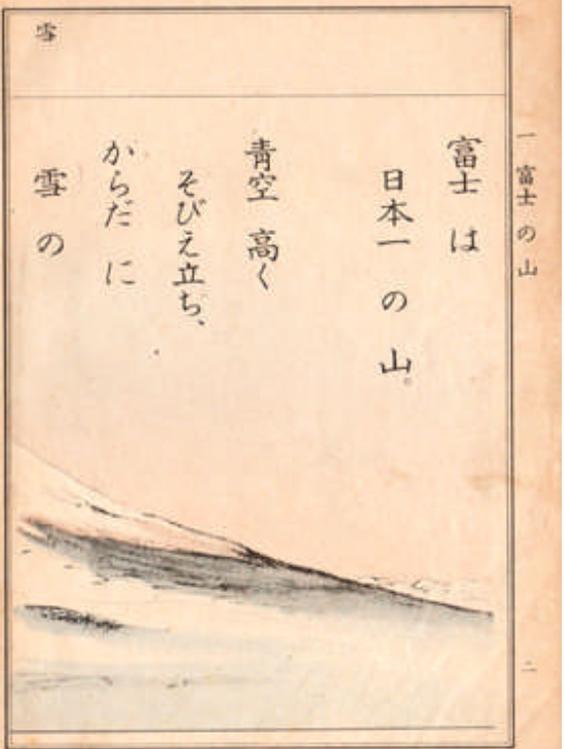
そびえ立ち、

からだに

雪の

着物

着て、



かすみの
すそを

遠くひく、

富士は

日本一の山。

(新漢字 雪 着物)

(005. JPG)

二 かけっこ

一年生の旗取がすんで、いよいよぼ
くたち二年生のかけっこになりました
た。ぼくは、むねがどきどきして來
ました。

ぼくたち七人は、出発線に並びました。

「よいい。」

と先生のこゑ。

「どん。」

きくが早いかけ出しました。

そのうちに、二人が、ぼくの前へ

ぬいて 出ました。

「負ける もの か。」

ぼく は、一生けんめい に 走りました。

「しっかり。」

(新漢字 旗生 並先負)

(006.jpg)

「早く、早く。」

おうえん の こゑ も、ごちやごちや になっ
て きこえます。

もう 何も 見えません。ぼく は、むちゆう
で 走りました。すると、何か に つまづ
いて、ひどく ころびました。

「しまった。」

と 思ひながら、すぐ はねおきました。が、
もう みんな から、すっかり おくれて し
まひました。

「よさう か。」

と 思ひました。しかし、おとうさんが、
「負けて も よい から、しまひ まで 走

るものだ」。
とおっしゃったのを思ひ出して、また
一生けんめいに走りました。

(007.jpg)

「わあ。」

と、手をたゝいて、笑って 居る 者 も
ある よう でした。

きまりが わるい と

思ひながら、ぼく

は 決勝線 ま

で 走りました。

すると、先生 が

にここにこ して、

「太郎君、えらいぞ。ころんでも、よく

しまひまで 走った。かんしん、かんしん。」

と 言って、ほめて くださいました。



三 海軍の いさん

ぼくが べんきょう して 居ると、くつ
の音が して、だれ か うちへ はいっ

(新漢字 君 海軍)

(008. jpg)

て 来ました。出て 見ると、海軍の に
いさん でした。

にいさん は、にこにこ しながら ざしき
へ 上って、おとうさんに 御あいさつ を
しました。うらの 畠に 居た おかあさ
んも、かけて 来て、あたま から 手ぬぐ
ひを 取りながら、

「あゝ、よく かへって 来た ね。」
と うれしさうに おっしゃいました。

にいさんは、前 よりも ずっと 色が
黒く なって、強さうに 見えました。

おかあさんが、お茶 を 入れて、
「ほんとうに しばらく だった ね。まあ、

一つ おおあがり。」

とおっしゃいました。にいさんはおいしさうにのみました。ぼくはうれしくて、

(新漢字 御黒強茶)

(009. jpg)

そのまはりをとび歩きました。

にいさんは、

「勇、大きく なったね。いゝ子 になった。」

と言ひました。

「ぼくも、大きく なったら 海軍 だよ、

にいさん。」

と言ふと、

「さうだ、海軍 がいゝ。大ぢようぶな

れるよ。」

と、にいさんは、ぼくの あたまをな

でて くれました。

ぼくは、うれしくて たまりません。にいさ

んのぼうし

をかぶると、

おとうさんが、

「かはいらしい

(新漢字 勇)

(010. jpg)



海軍だな。ぼうしのおぼけのようだ。」

と 言って、お笑ひ になりました。ぼうしには、金で 字 が 書いて ありました。

「大日本、軍、それから 何 と 読むの。」

と きゝます と、にいさんは、

「だいにつぼん ぐんかん あかぎ。」

と おしへて くれました。

おふろ にはいって から、みんな 一しよに 御はん を いたゞきました。

にいさんは、御はん を たべながらも、

しじゅうにここにこ して 居ました。さうして、

軍かん や ひこうきの おもしろい 話

を、いろいろ と して くれました。にいさ

んの のって 居る 赤城 は、たкусんの

ひこうきが のせて あつて、それが、廣い

(新漢字 字 読 廣)

(011. jpg)

がんばん の 上 から、

じゆう に とんで 行く

の だ さう です。

「軍かん と いって も、

赤城 など は、動く

ひこう 場 の ような

もの です ね。」

と 言つて、にいさん は 笑ひました。

おとうさん は、「ほう、ほう。」と 言ひながら、

かんしん して きいて いらっしやいました。

ねる 時 には、ぼく は にいさんと 並

んで ねました。

四 天の岩屋

天照大御神 が、天の岩屋 へ おはいに
なつて、岩戸 を おしめ になりました。

(新漢字 岩)

(012. jpg)

明かるかつた 世界 が、急に まっ暗に
なりました。すると、今まで かくれて 居
た、いろいろ の わる者 が 出て 来て、
らんぼう を したり、いたづら を したり
しました。

大ぜい の 神様 が、お集り になつて、
「どう したら、よからう か。」

と、御そうだん なさいました。

思ひかねの神 と いふ、ちえ の あ

る 神様 の お考 で、神様方 の なさる
こと が きまりました。

或神様 は、大きい、りっぱな 鏡 を お作り
になりました。或神様 は、きれいな 玉 を
たくさん 作つて、くびかざり の ように、

ひもにお通しになりました。また、或神様は、山へ行つて、大きな榊の木を

(新漢字 明暗神 或作)

(013. jpg 挿絵あり)

根こぎにして、持つていらつしやいました。

この榊の木に、鏡と玉をかざつて、

岩屋の前に立て、また、たくさん

にはとりを集めて、岩屋の前でお

鳴かせになりました。

た。

この時、天のうずめ

のみことは、岩屋の

前へ進んで、まひ

をなさいました。か

づらをたすきに

かけ、さゝの葉を

手に持つて、ふせた

をけをだいにし

て、その底をと



んどん ふみ鳴らしな

(新漢字 進葉底)

(014. jpg)

がら、こっけいな 手ぶり や 身ぶりを し
て、おもしろく おまひ になりました。

大ぜいの 神様 は、どっと お笑ひ に
なりました。

あまり おもしろさうな ので、天照大御神 は、
少しばかり 岩戸 を あけて、おのぞきに
なりました。すると、神様方は 神の 木
を、ずっと 前へ お出し になりました。

大御神 の お姿 が、鏡 に うつりました。
大御神は、いよいよ ふしぎ に お思ひ に
なつて、少し 戸の 外へ 出よう と な
さいました。

岩戸 の そば で 待って いらつしやつた
天手力男のみことは、この 時 とばかり、
さつと 岩戸 を あけて、大御神の お手を
取つて、外へ お連出し 申しました。



(015. jpeg)

世界中 が、もとの ように 明かるく な
りました。大ぜい の 神様 は、手 を うつ
て およろこび になりました。

五 七面鳥

私 ノ ウチ ニハ、七面鳥 ガ 居マス。弟
ノ 三チャン ハ、コノ 七面鳥 ガ 大キラヒ
デ、時々 ソレ ヲ イヂメル ノ デス。デ、
七面鳥 ノ 方 デモ、マタ、三チャン ヲ イ
ヤガツテ 居ル ヨウ ニ 見エマス。
三チャン ガ 才庭 へ 由ル ト、七面鳥 ハ、
スグ「グル グルツ。」ト イツテ、ニラミツケ
マス。マルデ、「今ニ グヒツイテ ヤルゾ。」

ト 言ツテ 居ル ヨウ デス。

今朝 ノ コト デシタ。三チャン ガ、才庭
デ、石 ヲ ヒロツテ 七面鳥 へ ナゲツケ

(新漢字 面鳥弟庭今朝)

(016. jpg)

マシタ。

トウトウ 七面鳥 モ、ガマン ガ 出来ナク

ナツタ ノ デセウ。「グル、グル、グルツ。」ト

ウナツタ カ ト思フ ト、急ニ羽ヲ

ヒロゲ、カラグ ヲ フクラマセ、アタマ ヲ

下 へ 向ケテ、三チャン ノ 方 へ 近ヅ

イテ 来マシタ。サウシテ ジツト ニラミツ

ケテ 居ル ノ デス。

三チャン モ、コブシ ヲ

ニギリナガラ、ニラミカ

ヘシテ 居マス。

ニハトリドモ ハ、皆

フルヘナガラ、スミノ

方 へ 走ツテニゲマ

シタ。



ソノ時、一匹ノ白イ喋ガヒラヒラト

(新漢字 皆 匹)

(017. jpg)

トンデ 來マシタ。スルト、三チャン ハ、思ハズ、チラツト ソノ方ヲ 見マシタ。

「サア、今ダ。」ト 思ツタ ノカ、七面鳥 ハ、

ソノ スキ ニ、一足トビ ニ トビカ、リマ

シタ。サウシテ スルドイ ロバシ デ、タク、

タク ト、三チャン ノ アタマ ヲ ツ、キマ

シタ。三チャン ハ 急イデ フリ向キマシタ

ガ、七面鳥 ハ マスマス ツ、イテ 來マス。

トウトウ「ネエサン、ネエサン。」ト、泣キゴエ

デ、私 ヲ 呼ビマシタ。

私 ガ 走ツテ 行ク ト、七面鳥 ハ ビツク

リ シテ、アワテテニゲテ 行ツテ シマヒ

マシタ。

六 ゆめ

ゆめが、

(新漢字 足)

(018. jpg)

ほんとで あれば よい。

ぼくが 作った ひこうきが、

ぼくをば のせて とんだ ゆめ。

月の 世界へ 行った ゆめ。

ゆめが、

ほんとで あれば よい。

ぼくが なくした にいさんの、

まんねんひつが あった ゆめ。

それを、にいさん、くれた ゆめ。

七 逃げた らくだ

(一)

さばくの中で 或旅人が 二人の
商人に出あった。

旅人「あなた方は、大そう心配らしい御様

(新漢字 逃 旅 商 様)

(019. jpg 挿絵あり)

子ですが、もしや、らく

だを逃したのでは

ありませんか。」

二人「さうです、さうです。」



旅人「そのらくだは、片目

ではありませんか。右

の目がつぶれて居ま

せう。」

二人「よく御存じ ですね。全く その 通り です。」

旅人「さうして、左の 足が 一本 短くて、前歯 が、二三本、ぬけて 居ませう。」

二人「それ に ちがひ ありません。どこで 御らん になりました か。」

旅人「さうして、つけて 居た 荷物は、麥 でせう。」

(新漢字 子片存全荷物)

(020. jpg)

二人「たしか に さう です。どこ に、居るか、どうか、早く をしへて ください。」

旅人「いや、私は その らくだ を 見た の ではありません。」

甲 の 商人、

「え、でも、そんな に くはして 御存じ

では ありません か。」

乙 の 商人、

「それとも だれか に おきよ になつ

たのですか。」

旅人「いゝえ、見たのでも、きいたのでもありません。」

二人は、かほを見合はせて、

甲「をかしいね。こいつがどろぼうだぞ。」

乙「さうだ、そうだ。さあ、役所へ、ひっぱって行け。」

(新漢字 甲 乙)

(021. jpg)

二人は、むりに旅人を役所へひっぱって行った。

(二)

役人は、三人を呼出して、

役人「たい、どういふことか、くはしく申せ。」

甲「この男が、私どものらくだをぬすんだので、ごぞいます。私どもは、麥をつけたらくだをひいて、さばくの中を、通って居ましたが、とちゅう

で 一休 して 居る うち につい 眠つ
て しまひました。」

乙「目 が さめて 見る と、らくだ が 居
ません ので、おどろいて 方々 さがして
歩きました。その とちゆう で、この 男
に 出あひます と、向かふ から、『らくだ

(新漢字 眠)

(022. jpg)

を 逃した の ではない か』と 尋ね
る ので ございます。」

甲「さうして、その らくだ は、片目 だらう
の、びっこ だらう の、齒 が ぬけて 居
る だらう の と、一々、見た ように
申す ので ございます。」

乙「その 上、つけて 居た 荷物 の 品 ま
で 言ひあてました。」

二人「らくだ を ねすんだ のは どうしても、
この 男 に ちがひ ありません。」

役人「こりや、旅人。その方 にも、言ひ分 が
ある ならば、申せ。」

旅人「私をぬす人などとは、どんでもないことでございます。私がさばくを歩いて居ますと、らくだの足あとがつづいて居るのに、人の

(新漢字 尋 品)

(023. jpg 挿絵あり)

足あとが見えません。それで、らくだ
が逃げたのではないかと思っ
たのでございます。」

役人「そのらくだが片目だといふ
ことは、どうしてわかったか。」

旅人「道の片がはの草ばかりが、くっ
てあったからでございます。」

役人「それでは、びつこといふことは、ど
うして知って居るか。」

旅人「片方の足あとが、

一つおきに浅くな

って居るのでわか

りました。」

役人「齒のぬけて居る

といふことは、ど

うしてわかったか。」

(新漢字 浅)

(024. jpg)

旅人「草をくひ取ったあとを見ますと、かみきれない

で残って居る葉があるので、さう考へ

ました。」

役人「なるほど、きいてみれば、一々もつともである。」

二人「もしもし、お役人様、それなら、荷物の

品を、どうして知って居るのでござ

いませうか。」

旅人「それは何でもありません。道に、

麥がこぼれて居たからです。」

役人「よしよし、よくわかった。たしかに、

お前がぬすんだのではない。もう、

かへってよろしい。二人が、うたがった

のも、むりではないが、今きいた

通りである。早く行って、らくだを

さがすがよい。」

(新漢字 残)

(025. jpg 挿絵あり)

八 よし子さん

今日、学校からのかへり通で、よし子さんにあひました。どうしたのか、しくしく泣いて居ました。

よしさんは、私たちの組で、一ばん小さい生徒です。

かはいさうに、よしさんのおかあさんは、長い間 病気でねていらっしやるのです。さう

して、よしさんの、おうち は、まづしいのです。



「よしさん、なぜ泣いて居るの。」
と私が、尋ねますと、よしさんは

(新漢字 組 徒)

(026. jpg)

泣きながら、おかあさんの くすりを 買
ふ お金を、五ミル、落した の だ と
答へました。

二人 で 一生けんめい さがしましたが、
どうしても 見つかりません。そこ へ ひよっ
こり、私 の おとうさんが おいで に
なりました。私 は どんな に うれし
かった でせう。

わけ を 話します と、おとうさんは す
ぐ 私たち を 近所 の くすり屋さん へ
連れて 行って、おくすり を 買って お上
げ になりました。

さうして

「さあ、早く かへって、おかあさん を 大
じ に して お上げ なさい。」

と、おとうさんが おっしゃいます と、よ

(027. jpg)

し子さん は、目になみだをためて、
いく度も、いく度も「ありがたう。」と言
って、かへって 行きました。

九 をろち たいち

天照大御神 の 御弟 に、すさのをのみこと
と 申して、大そう 勇気 の ある 神様
が いらつしゃいました。

或時、山雲 の ひの川 の 岸 を お通り
になる と、川上 から 箸 が ながれて
來ました。みことは、この 川上 に 人が
住んで 居る など お思ひ になつて、
川 について、だんだん 山奥 へ おはいろ
になりました。すると、おぢいさん と
おばあさんが、一人の むすめ を 中
において、泣いて 居ました。

(新漢字 御 勇 岸 上 奥)

「なぜ泣くのか。」

と、みことが お尋ね

になる と、おちいさんが、

「私ども には、もと、む

すめ が 八人 ございます

ましたが、八岐のをろ

ち と いふ 大蛇 に、毎年 一人 づつ

くはれて、もう この 子 一人 になり

ました。

今年 も、ちようど その 大蛇 が 出で

来る 時分 になりましたので、泣いて

居る ので ございます。」

と 申しました。

「二たい、どんな 大蛇 か。」

「長さは、八つの 山、八つの 谷に

(新漢字 今年 谷)

(029. jpg)

わたる ほど で、頭 が 八つ、尾 が



八つ、目はまつかで背中にはこ
けが生えて居ます。」

みことは、この話をおきよになつ
て、

「よし、その大蛇をたいぢしてやらう。

強い酒をたくさん造れ。さうして、

八つのをけに入れて、大蛇の来る

所に並べておけ。」

とお言ひつけになりました。

その通りに用意して待つて居ると、

間もなく大蛇が出て來ました。酒を

見つけて、八つの頭を八つのをけ

に入れて、がぶがぶとのみました。

そのうちに、よひがまはって、とうとう

眠ってしまひました。

(新漢字 頭酒意)

(030. jpg)

みことは、劍

をぬいて、大

蛇をずたず

たに お切り
になりました。赤
い血が、たきの
ように ながれました。
ひの川 の 水 が、まつか
になりました。



尾を お切り になつた 時、かちつと 音
が して、劍 の 刀 が かけました。ふし
ぎに お思ひ になつて、尾 を さいて
御らん になる と、大そう りっぱな 劍
が 出て 來ました。「これ は、たふとい 劍
だ。」と、みことは お思ひ になつて、天
照大御神 へ たてまつられました。

(新漢字 切 刀)

(031. jpg)

十 石だん

石 の だんだん 見上げたら、
高い 雲 まで つづく ほど。

五だん のぼれば、家が 見え、
十だん のぼれば、屋根 が 見え、
石の だんだん ゆっくりと、
一つ 一つ を 急がず に。
町が すっかり 見えて 来る、
道が 一すぢ 遠く まで。
石の だんだん 二十だん、
三十だん から、まだ 上 に。

(032. jpg)

とうとう 上 まで のぼったら、
海が 見える よ、目の 前 に。
どこ まで 広い 海 だらう、
空に つづいた 青海 は。

十一 トウモロコシ

正雄サン ハ、オカアサン カラ、ウチ ノ ウ
ラ ニ、セマイ 畠 ヲ イタゞキマシタ。

「何 デモ、アナタ ノ 好きナ 物 ヲ ウ
エ ナサイ。」

オカアサン ガ カウ オツシヤイマシタ ノデ、
正確サン ハ、「サア、何 ヲ ウエヨウカ。」
ト 考ヘタ 末、トウモロコシ ヲ ウエル
コト ニシマシタ。サウシテ、学校 カラ

(新漢字 正雄 末)

(033. jpg)

カヘツテ、ベンキョウ ガ スム ト、草取 ヲ
シテ、タネ ヲ マキマシタ。

ヤガデ、トウモロコシ ガ カハイ、芽 ヲ
出シマシタ。ソレ ヲ 見テ、正雄サン ハ
ウレシクテ、ウレシクテ タマリマセン。次
ノ 日 カラ ハ 毎日、朝 起キル ト、先
ヅ トウモロコシ ヲ 見 ニ、ウラ ヘ 出
マシタ。

.....

日 二 日 ニ ノビル トウモロコシ ハ、
イツ ノ間 ニカ、

オトナ ノ セイ

ヨリ モ 高

ク ナリマシタ。

サウシテ、タク

サン ミ ガ ナリ

(新漢字 芽 起 先)

(034. jpg)



マシタ。

正雄サン ハ 大ヨロコビ デス。

サツソク 友ダチ ノ カズヲサン ト一

シヨ 二、トウモロコシ ヲ モギ、皮 ヲ

ハギマシタ。 スルト、ニハトリ ガ イク羽

モ イグ羽 モ、コ、コ、コ、ト イツテ

走ツテ 來テ、ソノ ミ ヲ ツ、キ始メマ

シタ。

「二ハトリ ハ、自分 ダケ タベテ、ズルイ

ネ。ブタ ニモ ヤラウ。」

ト 言ヒナガラ、正雄サン ハ カタイ ミ

ヲ エランデ、ブタ ニモ ヤリマシタ。

ソコ へ、正雄サン ノ オカアサン ガイ

ラツシヤツテ、

「マア、リツパナ トウモロコシ ニ ナリマ

シタ コト。御ホウビ ニ、ソノ トウモロ

(新漢字 皮 羽)

(035. jpg)

コシ デ オイシイ オ菓子 ヲ 作ツテ

上ゲマセウ ネ。」

ト オツシヤイマシタ。

(新漢字 菓子)

十二 かぐやひめ

竹取のおきな と いふ おぢいさんが あ
りました。毎日 竹 を 切って 来て、ざる
や かご を こしらへて 居ました。

或日 の こと、も

と の 方 が 大

そう 光って 居る

竹 を、一本 見つ

けました。それを

切って、わって 見ま

すと、中に 小

さな 女の子が 居ました。おぢいさんは



(036. jpg)

よろこんで、手のひらへ のせて かへりま
した。さうして、おばあさんと二人で
そだてました。小さいので、かごの中
へ 入れて おきました。

この子を見つけて から、おぢいさん
の切る竹からは、いつも お金が出
て 来ました。それで、おぢいさんは、だ
んだん お金持 になりました。

この子は、ずんずん 大きく なって、三

月ほど たつと、十五六 ぐらゐの美しい むすめ になりました。おぢいさんは、この子に かぐやひめ といふ名をつけました。

そのうちに、世間の 人々 は、かぐやひめ のことを きいて、「自分が むこにならう。」「私のよめ に ください。」と

(新漢字 間)

(037. jpg)

申しこみました が、かぐやひめ は どうしても しょうち しません。おぢいさんも、「自分の ほんとう の子 で ない から、私の 思ふ よう には なりません。」と 言って 居ました。後 には、との様 から、奥方 に したい と の お言葉も ありました が、かぐやひめ は、それも おことわり いたしました。

かうして 何年 か たちました。或年 の 春 の ころ から、かぐやひめ は、月の 明かるい 晩 には、月 を ながめて、何

か考へて 居る よう でした。八月の
十五夜 近く なる と、こゑ と 立てて
泣いて ばかり 居ました。おぢいさんや
おばあさんが、なぜ 泣く の か と き
きます と、かぐやひめ は、

(新漢字 言 春 晩 月)

(038. jpg)

「私 は、もと 月 の 都 の 者 で、」
ざいます。長い 間 お世話 に なりまし
たが、この 十五夜 には、月 の 世界
から むかへ に まゐりますので、かへ
らなければ なりません。皆さん に お別
れ する の が つらくて、泣いて 居る
ので ざいます。」

と 言ひました。おぢいさん は おどろいて、
「それは 大へん だ。むかへ に 来て
も、わたし もの か。」
と 言ひました。

おぢいさん は、何 と か して、かぐやひ

めをひき止めたいと思ひました。さうして、このことをとの様に申し上げますと、との様は、

「それでは、その晩には、兵たいを

(新漢字 話別兵)

(039. jpg)

たくさんやって、月の都の使が
來たら、追ひかへしてしまはう。」

とおっしゃいました。

いよいよ十五夜の晩になりました。

おぢいさんの家のまはりは、兵たい
がいくへにも取りかこみました。

夜なかごろになるのと、急に、お月様
が十も出たかと思ふように、
あたりが明かるくなりました。

「さあ、來たぞ。」

と、兵たいたちは、弓に矢をつがへ
ようとしましたが、目がくらんで、
どうすることも出来ません。

その時、たくさん
の天人が、雲に

のって 下りて 來ました。かぐやひめも、
今は しかた が なく、泣いて 居る おぢ

(新漢字 追 弓 矢)

(040. jpg 挿絵あり)

いさん と おばあさん
に 向かって、

「今 お別れ 申す こ

と は、まことに

かなしう ございます

が、いたしかた が

ありません。月夜 の

晩 には、どうか、私

の こと を 思ひ出して

ください。私 も、お二方

の 御おん は、けっして

忘れません。」

と 言って、夫人 の 用意

して 來た 車 に のって、

空 へ 上って 行って しま



ひました。

(新漢字 上)

(041. jpg 挿絵あり)

十三 かなりや

私のうちに、かなりやが一羽かつて
ありました。大そうよくなれて、私の
手からゑをたべるほどになって
居ました。

それが、かはいさうに、或晩、ねずみに
あしの指をくひ切られました。

どんなにか鳴いた
のでせうが、うち
の者は、朝まで
知らずに居ました。

きずを見てやらう
と思つて、私がか
ごの戸をあけま
すと、かなりやは

とび出して、竹がきの上に止って、それから、うらの山へとんで行ってしまひました。

これは、私の七つの年のことでした。今でも、かなりやのこゑをきくと、まだあれが生きて居るだらうか、あしのきずはどうしたらうかど思はないことはありません。

十四 大江山(おおえやま)

大江山にしゅてんどうじといふ鬼が居て、時々都に出て来ては、物をぬすんだり、女や子どもをさらったりしました。

都は大きわぎです。

天子様は、大そう御心配になつて、頼

(新漢字 鬼配)

光といふえらい大將に、しめてんど
うじをたいぢするようにお言ひつ
けになりました。そこで、頼光は、五人
の強いけらいを連れ、山伏の姿
をして出かけました。

大江山に来て見ると、鬼の住む
所だけあって、大木がこんもりと生
ひしげり、書でもうす暗くて、ほんとう
にもものすごい山でした。しかし、みんな
強い人たちですから、びくともせず、
けはしい山道を上ったり、深い谷を
渡ったりして、だんだん奥へ進んで
行きました。

しばらく行くと、大きな岩があつて、
そのそばに、一人のおぢいさんが
立って居ました。さうして、

(新漢字 將 木 生 書 渡)

(044. jpg)

「あなたは、頼光様ではありませんか。

私は、今日あなたがこゝにおいでになるときいて、お待ちして居たのです。この酒は、鬼がのめば弱くなり、人間がのめば強くなる、ふしぎな酒です。これを持って行って、鬼をたいぢしてください。」
と言って、一のつばを渡しました。

頼光は喜

んで、そのつばを受取りました。

もつと進んで行きますと、



今度は、谷川で、一人の若い女が、しくしくと泣きながら、せんたくをして

(新漢字 弱 喜)

(045. jpg)

居ました。頼光がふしぎに思って、

「なぜ泣いて居ますか。」

と尋ねますと、女は、

「私は都の者ですが、鬼にさらはれて、こゝに來ました。いつ殺されるかわかりません。それがかなしくて、泣いて居るのです。」

と言ひました。頼光は、
「私は、天子様のおほせを受けて、その鬼をたいぢに來ました。鬼の居る所はどこですか。あんないしてください。」

と言ひますと、女は、大そう喜んで、
「まあ、何といふありがたいことでせう。どうぞ、鬼をうち取って、私たちをお助けください。」

(新漢字 殺)

(046. jpg)

と言って、先に立って道あんないをしました。

やがて、向かふに、大きな鐵の門が見えました。そのそばに、鬼の番兵

が、鐵のぼうを持って、立って居ました。頼光は、そこへ行つて、

「私たちは山伏ですが、道に迷つて困つて居ます。どうぞ、一晚おとめください。」

と言ひました。

鬼の番兵は、一度奥へはいりましたが、また出て来て、頼光たちをしめてんどうじの居るりっぱな御殿へ連れて行きました。

しめてんどうじは、けらいの鬼どもを大ぜい集めて、酒もりをして居ました。

(新漢字 先番迷困酒)

(047. jpg)

瀬光たちがはいつて来るのを見ると、大きな目をむいて、ぎよろりとにらみましたが、

「山状たち、とめて上げよう。ゆつくり休むがよい。」

と言ひました。頼光は、

「ありがたうございます。私どもは、毎日、
野や山にばかりねて居ました
が、今夜は、おかげでゆつくり休
まれます。ちようど
お酒もりのさい
ちゆうのようで
すが、私もよ
い酒を持って
居ます。一つめし

(新漢字 野)



(048. jpg 挿絵あり)

上って ください。」

と 言って、おぢいさん から もらった 酒
を 取出しました。

しゅてんどう は、一口 のんで みる と、
これ までのんだ こと も ない ような、
おいしい酒 です から、

「これは うまい。これは よい 酒だ。」

と 言つて、がぶかぶ のみました。外の 鬼
ども も、次々 と たくさん のみました。
そのうち に、ふしぎな 酒 の きよめ が
あらほれて、しめてんどうじ は、だんだん
元気が なく なり、しまひ には ぐったり
と ねて しまひました。外の 鬼ども も、
あすこ へ 二匹、こゝ へ 三匹 と、ごろ
ごろ たふれて しまひました。

この 様子 を 見た 頼光たち は、持つて

(新漢字 元)

(049. J P G)

來た よろひ や かぶと を 取出して、身
じたく をしました。

頼光 は、しめてんどうじ を 呼起し、刀
を 抜いて、「えい。」と 一聲、その 首 を

切落しました。ところが、首 は とび上つて、

口 から 火 を はきながら、頼光 の 頭
に かみつかう と しました。けれども、頼

光 の いきほひ に おそれて、その まゝ
落ちて しまひました。

この さわぎ に、外の
鬼ども が 目 を さ
まして、向かって 來ま
した が、頼光たち 六
人 に、みんな 殺され
て しまひました。

そこで、頼光 は、しめてんどうじ の 大きな

(新漢字 抜 頭)

(050. JPG)

首 を、けらい に かつがせ、さらはれて
來た 女 や 子どもたち を 連れて、めで
たく 都 へ かへりました。

十五 白兔

島 に 居た 白兔 が、向かふ の 陸 へ
行つて みたい と 思ひました。

或日、濱べ へ、出て 見ると、わにざめ
が 居ましたので、



「君の仲間では、ぼくの仲間とどっちが多いか、くらべてみよう。」

と言ひました。わにざめは、

「それは、おもしろからう。」

と言つて、すぐに、仲間を大ぜい連

れて、來ました。

白兔は、それを見て、

(新漢字 島陸仲多)

(051. jpg)

「なるほど、君の仲

間は、ずいぶん多い

な。これでは、ぼく

らの方が負け

るかも知れない。

君らの背中の上

を歩いて、かぞ

へてみるから、向

かふの陸まで

並んでみたまへ。」



と言ひました。

わにぎめ は、白兔の
言う通りに並びま

した。白兔 は、「一つ、

二つ、三つ、四つ。」と かぞへて、渡って行

きました が、もう一足で陸へ上ら

(新漢字 背)

(052. JPG)

うといふ所で、

「君ら は、うまく だまされた な。ぼく

は、こゝへ 渡って 来たかったのだ。

あはゝゝ。」

と 言つて 笑ひました。

わにぎめ は、それを きくと、大そう

おこりました。一番 しまひに 居たわ

にぎめ が、白兔 を つかまへて、からだ

の毛を みんな むしり取つて しまひ

ました。

白兔 は、痛くて たまりません から、濱べ

に立つて 泣いて 居ました。その時、大

ぜいの神様が お通り になって、

「お前、なぜ 泣いて 居る の か。」

と お尋ね になりました。白兔 が、今

までの こと を 申します と、紳様 は、

(新漢字 痛)

(053. jpg)

「それなら、海の水を あびて、ねて

居る が よい。」

と おっしゃいました。

白兔 は、すぐ海の水を あびました。

すると、痛み が 一そう ひどく なって、

どう にも たまらなく なりました。

そこ へ、大國主のみこと と いふ 神様

が おいで になりました。この 方 は、

先ほど お通り になった 神様方 の 弟

さん です。兄様方 の 重い ふくろ を

かついで いらっしゃった ので、おそく お

なり になった の です。

この 大國主のみこと も、

「お前、なぜ泣いて居るのか。」
とお尋ねになりました。白兔は泣きながら、また今までのことを申し

(新漢字 兄重)

(054. jpg)

ました。大國主のみことは

「かはいさうに。早く

川の水でから

だを洗って、がま

のほをしいて、その上にころが

るがよい。」

とおっしゃいました。

白兔がその通りにしますと、から

だは、すぐもとのようになりまし

た。喜んで、大國主のみことに、

「おかげ様で、すっかりなほりました。

あなたは、おなさけ深いお方ですか

ら、後には、きつとえらいお方に

おなりでせう。」

と申しました。



(新漢字 後)

(055. JPG)

白兔の言った通り、大國主のみことは、
その後、えらいお方におなりにな
りました。

十六 一足々々

一足々々、遠い所へ進み行き、
一くは 1くは、廣い畠を打ちかへす。
一針々々、金絲 銀絲 でぬひせぬひ、
一こて 一こて、大きな家のかべを
ぬる。

ちりが つもつて 山となり、
しづくが 寄って 海となる。

(新漢字 絲 寄)

十七 百合若

(056. jpg)

昔、百合若 といふ、弓 の じょうずな
大將 が ありました。

或年、外國 の 軍ぜい が、たくさんの
舟 に のって、 攻寄せて 來ました。

天子様 は、百合若 を お召し になって、
「早く 行って、敵 を 追ひはらへ。」

と おっしゃいました。

百合若 は、大きな 鐵 の 弓 と 鐵 の
矢 を 持ち、大ぜい の けらい を 連れ
て 出かけました。さうして、さかんに 鐵
の 矢 を 射かけました ので、敵 の 舟
は、次々に しづめられ、残った 舟 は、
ちりぢり になって 逃出しました。そこで、
百合若 の 軍ぜい は、舟を 出して 追
ひかけ 迫ひかけ、とうとう、敵 の 舟 を
すっかり 追ひはらって しまひました。

(新漢字 昔外國攻召射)

(057. jpeg)

かうして、勝ちに勝った百合若の軍
ぜいは、もとの濱べへひきかへす
ことになりました。ところが、かへる
とちゆうに、きれいな島がありました
ので、百合若は、けらいの雲太郎 雨太
郎といふきょうだいの者を連れて
て、その島へ上ってみました。そこ
には、美しい草が一面に生え、かは
いらしい鳥が
おもしろく歌って
居ました。

「あゝ、よい所
だ。しばらくこ
こで休むこ
とにしよう。」
と 言って、百合若



(新漢字 勝 歌)

(058 . j p g)

は、ぐろりと草の上になごろびました。

長い間のつかれが出たと見えて、百合若は、いつの間にか、ぐっすりねこんでしまひました。さうして、三日三晩たつても、まだ目がさめませんでした。

この様子を見て、雲太郎きょうだい は、ふと、わるい心を起し、百合若を島におき去りにして、自分たちが大將にならうと考へました。二人は舟へかへって、

「大將は、矢のきずがもとで、とうとう、この島でおなくなりになつた。」

と言ひふりました。

(新漢字 心)

雲太郎きょうだい は、百合若 軍ぜい を
ひきゐて かへりました。さうして、天子様
に、

「百合若 は うち死 を いたしましたか
ら、私たち きょうだい の 力 で、敵
を すつかり 追ひはらって まゐりました。」
と 申し上げました。

きょうだい は 思ひ通り 大將 と なり、
これ まで 百合若 の 居た、りっぱな 城
に 住んで、いばって 居ました。

その 後、何年 か たって から の こと
です。なんせん して、鬼が島 へ 流れつい
たりようし が、鬼 を 一匹 連れて か
へつて 来た と いふ うはさ が つたは
りました。これ を きいた 雲太郎きょうだ
いは、

(新漢字 城 流)

「それは珍しいものだ。すぐ連れて来い。」

と、けらいに言ひつけました。

連れられて来たのを見ると、かみも、ひげもぼうぼうとのび、かほも、手足もあかにうづまって、まるで、こけが生えたような男でした。

「なるほど、鬼のようでもあり、人のようでもある。都へ連れて行ったら、人が珍しがって見るだらう。」

と言って、雲太郎きょうだい は、その男に「こけ丸」といふ名をつけ、しばらく家におくことにしました。

そのうちに年がかはって、お正月になりました。雲太郎 雨太郎 は、けらいを集めて弓の會を開きました。

(新漢字 珍會開)

(061. jpg)

雲太郎が弓を射ようとする時、

「あはゝゝ、何だ、あんな弓しか引けないのか。」

と、大きなこゑで笑ふ者がありませんでした。見ると、それはこけ丸でした。

雲太郎は、おこつて言ひました。

「何だ、こけ丸。もう一度言ってみろ。」

こけ丸は、平氣なかほで、

「そんな弓は、赤んぼうでも引けませう。はゝゝ。」

と、また笑ひました。

「何を生意氣な。それなら、これを引いてみる。」

と言って、雲太郎は、一番強い弓を渡しました。

(新漢字 引平生)

(062. jpg)

こけ丸は、すぐそれを折つてしまひました。雲太郎はくやしがつて、昔百合

若 が 使 っ た 鐵 の 弓 矢 を 持 ち 出 さ せ
ま っ た 。 さ う し て 、

「こ れ を 引 い て み る 。 百 合 若 様 の
弓 矢 だ 。 引 け な か っ た ら 、 命 が な い ぞ 。」
と 言 ひ ま っ た 。

こ け 丸 は 、 に つ こ り 笑 っ て そ の 弓 を

取 上 げ 、 鐵 の 矢

を つ が へ て 、

満 月 の

よ う に

引 き し ぼ り

ま っ た 。 急 に 、

矢 先 を き よ う だ い

の 方 へ 向 け て 、



(新漢字 折命 満月)

(063. jpg)

「見 忘 れ た か 。 わ れ こ そ そ の 百 合 若
だ 。 か く ご し ろ 。」

と 言 ひ ま っ た 。 二 人 は 、 お ど ろ い て 逃 出

しましたが、すぐに射殺されてしまひました。

十八 虎 ト 蟻

大キナ 虎 ガ 山奥 デ、

「ドウモ ワカラナイ ノ ハ、アノ 弱イ

人間 ガ、ワレワレ ノ 仲間 ヲ 生ケド

リ ニスル コト ダ。」

ト ヒトリゴト ヲ 言ヒマシタ。ソノ 時、

「アハ、。」

ト 笑フ 者 ガ アリマシタ。虎 ガ 見マ

ハシマシタ ガ、ダレ モ 居マセン。

「ダレ ダイ、今 笑ツタ ノ ハ。」

(064. jpg)

「私 デス。蟻 デス。」

ナルホド、ゴマ粒 ホド

ノ 蟻 ガ 一匹、虎

ヲ 見上ゲテ 居マス。



「何デ 笑ツタ。」

「ダツテ、ワカリキツタ

コト デセウ。人間

ガ アナタ方 ヲ 生ケドリ ニ スル ニ

ハ、イク人 カ デ、カ ヲ 合ハセル デ

ハ アリマセン カ。私ドモ ダツテ、大ゼ

イ シテ カ、レバ、アナタ方 ニ 負ケマ

セン。」

虎 ハ オコツテ、蟻 ヲ フミツブサウ ト

シマシタ。蟻 ハ 虎 ノ 指 ノ マタ カラ

クビツテ、仲間 ノ 者 ニ アヒヅ ヲ シ

マシタ。

(新漢字 粒)

(065. jpg)

サア 大ヘン、何千匹 カ 何萬匹 カ、カズ

カギリ モナイ 蟻 ガ、マツ黒ニナツテ、

出テ 來マシタ。サウシテ、虎 ノ 目 鼻

耳 ロ、所 キラハズ 食ヒツキマシタ、頭

ノ テツペン カラ 尾 ノ 先 マデ カラ

ダ中 スキ間 モ ナク。

虎 ハ ウンウン ウナツテ、カケマハル ヨ
リ 外、ドウ スル コト モ、出来マセン。

トウトウ 弱ツテ、蟻 ニ、

「アヤマッタ。」

ト 言ヒマシタ。

十九 羽衣

白い 濱べの

松原 に、

波 が 寄せたり、

(新漢字 萬 耳 食 衣 原 波)

(066. jpg)

返したり。

かもめ すいすい

とんで 行く、

空 に かすんだ

富士の山。

一人のりょうしが、三保の松原へ出て来ました。

りょうし「あゝ、よい お天氣だ。さうして、まあ、何といふよい 景色だらう。」
景色に見とれながら歩いて居ますと、どこからか、よいにほひがして来ました。ふと見ると、向かふの松の枝に、何かきれいな物がかゝって居ます。

りょうし「おや、あれは何だらうな。」

(新漢字 返 枝)

(067. jpg)

りょうしはそばへ寄つて、よく見ました。

りょうし「着物だ。こんなきれいな着物は、まだ見たことがない。持つてかえて、うちのたから物にしよう。」

りょうしは、その着物を取つて、持つて

行かうとしました。すると、その松の木の後から、一人の女が出て来ました。

女「もし、それは私の着物でござい
ます。どうしてお持ちになるの
でございませうか。」

りようし「いや、これはわたしが拾ったの
です。持ってかへって、うちのたから物
にしようと思ひます。」

女「それは、天人の羽衣で、あなた方

(新漢字 後拾)

(068. jpg)

には御用のない物でございませう。
どうぞ、お返しくださいませ。」

りようし「天人の羽衣なら、なほさら
お返しは出来ませぬ。日本の國のたから物に
します。」

天人「それがないと、私は天へか
へることが出来ませぬ。どうぞ、お返

し くださいませ。」

りようし「いや、いけません。返されません。」

りようし は、どうして も 返しません。天人

は、悲しさうな かほ を して、じつと 空

を 見上げました。

天人 の しをれた 様子を 見て りようし

も 氣の毒 に 思ひました。

りようし「あんまり お氣の毒 です から、羽衣

を お返し いたしませう。」

(新漢字 國 悲)

(069. j p g)

天人「それは ありがたう ございます。では、

こちら へ いたゞきませう。」

りようし「お待ち ください。その 代り に、天

人の まひ を まって 見せて くださ

いません か。」

天人「おかげ で 天 へ かへられます。おれ

いに まい を いたしませう。でも、そ

の 羽衣 が ない と、まふ ことが

出来ません。」

りようし」と言って、羽衣をお返ししたら、
あなたは、まはずにかへっておしま
ひになるでせう。」

天人「いゝえ、天人はけっしてうそを
申しません。」

りようし「あゝ、はづかしいことを申しま
した。」

(新漢字 代)

(070. jpg)

りようしは羽衣と返しました。天人
は、それを着て、しづかにまひ始めま
した。

天人「月の都の

夫人たちが、

黒い衣の

そろいでまふと、

月はまつ黒、

やみの夜。

月の都の
天人たちが、
白い衣の
そろひでまふと、
月は十五夜、
まん圓い。」

(新漢字 圓)

(071. jpg)

天人は、まひなが
ら、だんだん天へ
上って 行きました。

右に、左に
ひらひらと、

動くたもとの

美しさ。

白い濱べの

松原に、

波が寄せたり、

返したり。



いつの間にやら

天人は、

春のかすみ

(072. jpg)

包まれて。

かもめ すいすい

とんで 行く、

空に ほんのり

富士の山。

二十 夏休

明日 から うれしい 夏休、

まぶしく 晴れた 大空 に、

眞白い 雲 が 浮いて 居る。

明日 から うれしい 夏休、

山べ に 野べ に 白百合 が、

ゆめ 見る よう に 咲いて 居る。

(新漢字 包 夏 明日 晴 眞 浮)

(073. jpg)

明日 から うれしい 夏休、

まき場 の 馬 が 朝風 に、

いなゝきながら 呼んで 居る。

明日 から うれしい 夏休、

大波 小波 打寄せて、

わたし を 海 が 待って 居る。

漢字表

雲雪着物旗並先負軍御黑強茶勇字讀廣岩明
暗神或作進葉底身連申面弟庭皆匹逃旅商片
存全荷甲乙眠尋品淺殘組徒岸奧谷頭酒意切
刀雄末芽起皮菓春晚兵迫弓矢鬼配將晝渡弱
喜殺番迷困野元拔島陸仲多背痛兄重後糸寄
骨國攻召射勝歌域流珍會開引平折命滿粒萬
万耳食衣原波返枝拾悲代圓包夏晴眞浮場馬
(新出)

(074. jpg)

生君海鳥今朝足樣子物御勇上今年正先羽子
間言月話別上木生先酒頭絲外心生月後國明
日

(讀替)

富士出撥線決勝城場天天照御鏡榊手男蝶短
齒出雲箸八岐蛇造劍畠江賴光伏殿聲兔百
合敵虎蟻鼻保景色白咲

〔讀替〕

生君海鳥今朝足様子物御勇上今年正先羽子
間言月話別上木生先酒頭絲外心生月後國明

日

〔假名附〕

富士ふじ出い發しん線つ決ハツ勝セン城ケツ場シヨウ天キ照チヨウ御アマテラス鏡ミタマ神カミ手テ男ヲ蝶テフ短ミ
齒ハ出ツ雲モ箸ハシ八ヤ岐マタ蛇ジャ造ツクリ劍ツルギ畠ハタケ江エ賴ライ光コウ伏フス殿テン聲セイ鬼ウ百ヒャク
合アヒ敵ト虎キ蟻アリ鼻ハナ保ホ景ケ色シキ白シラ咲サク

を
わ
り

日本語読本（4）

昭和十二年三月 七日印刷

昭和十二年三月十一日発行

著作権所有 著作権・発行者
ブラジル日本人教育普及會

東京市芝區芝浦一丁目二十三番地
單式印刷株式會社

印刷者 和田 助 一

東京市芝區芝浦一丁目二十三番地
印刷所 單式印刷株式會社